

現代短歌分類辭典

別名 現代短歌總索引

第六十八卷

津 端 亨 編纂



日文 701675509

148975

津 端 亨 編 纂

現代短歌分類辞典

第六十八卷

大连外国语学院
藏书

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

昭和五十七年六月二十五日発行 定価一、八〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

〒111

東京都台東区烏越一―十一―八

発行所 現代短歌分類辭典刊行所

代表者 津 端 亨

振替 東京 三―九三一―四

電話 〇三―八五一―九八六九

生くちふ
いくち紅たけ
幾千まはり
いくちもと
幾町
幾丈
幾町歩
幾千代
幾ちよろづ
いくつ
いくつ(幾歳)
幾通
幾通話
いくつ—か
いくつ—が
いくつ—か—が
いくつ—かなかな

一 元 二 一五 一 五 八 六九 二 一四 一 二 五 一 一 一 二

三 〃 三 〃 〃 〃 三 三 〃 五 〃 五 〃 〃 〃 五 〃 〃 五

いくつ—か—に
いくつ—か—の
いくつ—か—は
いくつがひ
いくつ—か—も
いくつ—枯山
いくつ—か—を
幾月
幾杯
いくづき
幾月にち
幾月日
幾月ぶり
幾月目
いくつ—すすき
いくつ高山
幾つたぎち

一 一 一 二 八 二 一 一 一 二 元 一 四 一 六 五 三

一五 〃 〃 一五 〃 〃 〃 〃 一五 一四 一四 〃 〃 一四 一五 〃 三

幾つ溪
 幾つ―つがひ
 いくつ年
 いくつ―ト―チカ
 幾つ―夏
 いくつ―に
 いくつ―に―も
 いくつ―の
 いくつ―は
 いくつ―低山
 幾粒
 幾つ室
 幾坪
 幾つ―松茸
 幾つまみ
 幾つ―嶺
 いくつ―も

一五 一 一 一 三 一 五 一 五 三 六 六 一 一 一 一

一五 〃 〃 〃 〃 一五 〃 〃 一六 〃 〃 一五 〃 〃 〃 〃 一五

幾徹夜
 幾敵
 幾帝王
 幾梯団
 いくつをか
 いくつ―を
 幾つるべ
 幾つるぎ
 いくつらね
 いくつらなり
 幾列
 幾つ―山谷
 幾つ―山
 いくつ―や
 いくつ―も―の
 いくつ―も―に
 いくつ―も―が

一 一 一 一 一 一六 一 一 二 一 九 一 四 一 六 一 三

〃 〃 〃 一五 一六 〃 〃 一七 〃 一八 〃 〃 〃 一五 〃 〃 一五

幾度目
いくーとも
いくどーも
幾鳥
幾十日
幾屯
いくーな
育苗
育苗機内
幾流れ
いくなさけ
いくなだり
イグナチオ教会
幾夏
いくなみ
いくならび
生くーなり

四 五 二 五 一 五 一 六 一 二 一 一 一 一 三 四 四

〃 〃 〃 二六 〃 〃 二五 〃 〃 〃 二四 〃 〃 二五 〃 二六 二六

いくーなり
いくーなれ
生名渡
生くーに
幾日
幾日ぶり
幾日前
幾にち目
いくにん
幾嶺
幾眠り
幾嶺呂
幾年
幾年ぶり
幾年まへ
幾年目
幾年輪

一 一 一 四 三 三 一 四 三 二 二 一 四 三 一 一 一

〃 三九 〃 三六 〃 三七 〃 三六 〃 三五 三四 三三 〃 〃 〃 二六 二六

牛野
 生野義拳
 いくノット
 生野の山
 いくのぼりーおり
 いくーのぼりーせし
 幾羽
 幾葉
 幾杯
 幾倍
 いくばく
 いくばくーか
 いくばくーが
 いくばくーかの
 いくばくーかは
 いくばくーぞ
 いくばくちやう

一 二 一 二 三 七 九 三 七 七 四 一 一 一 二 一 三

三四 " " 三五 三五 三四 " 三五 " 三四 " " " 三〇 " " 三九

合計

いくばくーと
 いくばくーとき
 いくばくーに
 いくばくーの
 いくばくーは
 いくばくびと

一 三 二九 一 一 九

四、一九五首

三七 三六 " " 三五 三四

いくたり【名詞】〔幾人〕

赤さびし工作機械にやすりかけて幾人もあらず少年工のほか②

赤錆びし自動車ボデーころがれば夜をここに来ていくたりねむる⑥

あかつきにまだ間のありていくたりか灯を振ふみゆふなの林に⑬

暁の松風の音を聞き澄し幾人か死にしわれもその病

あかつきの雪にながれし重臣等いくたりの血はをしへざらめや②

秋の日のポンポニダリヤ巡礼のいく人のごと竝ぶ畑かな②③（岩波文庫）

あきらけき道の上に立つ幾たりを君は見いでて喜びけむを⑫

あきらめの言葉むなく吐きすてていくたりかまたけふも堕ちゆく⑥

朝の間をいくたり競ひ門に問ふ槿柑ぼんかんは日日に色づきにけり③

朝日歌壇創設以来の切抜帳ここにも常連は幾人かある（朝日短歌二）

朝吹雪の窓より見れば通学の幾人の子等の野を過ぐる見ゆ①

いくたり

近藤芳美

木俣修

松村英一

門間春雄

白井大翼

與謝野晶子

斎藤茂吉

木俣修

竹尾忠吉

高玉清重

鈴木金二

いくたり

汗に濡れてここに水飼ひし兵達の今幾人か残りてあらむ○

美 禰 国 樹

あたたかにはた冷やかに　いくたりの眼はかはされつ　われをめぐりて②⑧

土 岐 善 磨

頭割られ腕傷つける幾たりが素手なるものをこの国のさま③

芦 田 高 子

可^{あた}惜しきいのち死なしめ嘆く母いくたり出づれば争ひの止む②

大 岡 博

あぢきなしさきだちし友いくたりのそのひとりだに居ばと思ふこと⑤

小 杉 放 庵

淡々と降りたる雪の凍る街駅より起きて行く幾人か②

近 藤 芳 美

あはまほしき人の幾たりなさまほしき事の幾つに命はかかる①(山と水と)

佐 佐 木 信 綱

相抱き泥ふみ行ける幾たりを見つし行くに雨つよくなる

小 暮 政 次

相共に酔ひなげきたる幾たりか就中直^{なかんづ}かりきほしいままなりき①

小 暮 政 次

雨樋をつたはりあそぶ子らくたり黄色の皮膚^{かな}愛し幼し

山 田 あ き

雨の中たつ幾たりの兄が消え深夜の駅にシャッター落ちぬ○

御 供 平 佑

歩みはやく幾人か行き夕ぐれのみどりの中にわかれゆく道④

小 暮 政 次

新たな企画をもちてたづねきしくたりよまた見ることもなし②①

新たな時待ちがてに死にゆきしくたりの名を今ぞかぞふる①⑨

新たに得たる同志のいくたりを汗ぬぐひ語る地方の報告②⑩

ある晩の会のくづれの幾人と河豚を食ひしは何年前か②

幾たりか兄の直きを知りつらん唯だに烈しき人と見つらん①④

いくたりか入り行きし谷の堅雪に光さす時かげろふ揺れぬ(新萬葉集七)

幾人か送りし兵が征つ時の眼差のみが眼に残り居り(支那事変銃後)

いくたりかカスタネットを投げすてて祖国の土に散りてぞゆきし

幾人が苦しき心に踏みにけむ踏絵の面へりて黒ずむ④
(新萬葉集八)

幾人か黒かみ断ちし若妻を訪ひては瘦するわがおもひなり(支那事変銃後)

幾人か今日来て云ふを聞き居ればぎりぎりのところは利益のことになる③

いくたりかけふも捕はれ風説ははてしなく不安をかきたててゆく⑦

いくたり

土岐善麿

土岐善麿

土岐善麿

臼井大翼

與謝野 寛

松村 英一

岡井 弘

美作まさ子

山田百合子

板垣喜久子

吉田 正俊

木俣 修

いくたり

いく人か心にかろく触れゆきぬ草のあたりをゆく水のごと⑬

いくたびか時雨のあめに洗はれて氷のごと冴ゆる苑の砂石⑥

いくたりか親しきものと世にありき たがひの限界をうべなひながら⑳

幾人か知りたる人の殺さるる目の前に見て君はのがれ来ぬ㊟

いくたりか秀れし同志わがもちて良き師にならむといひて面あぐ㊟

いく人か尊き生命失ひしこの国原の冬陽静けし(多磨二)

幾たりか血を吐くおもひにすがりけむ手垢に光るこの被告台

いくたりか疲れし旅の放浪者いこふ木影に我もいこへり㊟

いくたりか月を踏むともわれはかの西行のごと月を歌はむ㊟

いくたりか歳の三年に死ににけむ命かなしく我師を迎ふ㊟

幾人かにまた会ひおじぎばかりされいよいよ心よろはむとする㊟

幾人かの命亡びてあらむとき我はたばこを吸ひつつ思ふ㊟

與謝野晶子

木俣 修

土岐善麿

土屋文明

米田雄郎

石関秀雄

梨岡寿男

萬造寺 齊

岡野直七郎

杉浦翠子

長谷川銀作

美禰 国樹

幾人かのはらからが銭ぜにを出し合ひて貧しきながら汝を嫁がす①

幾たりかの人きて帰るひまひまに選歌急ぎつつ休暇は二日すぎたり⑤

幾人か乗る昇降機片すみに壘をつみ暗き階をのぼりぬ③（角川文庫）

いくたりかは忽ち轢殺され、戦車の下。あゝ無慙なるその死ざま。⑦

幾人かひとを葬りし去年こぞすぎて誰か歌よみのまた死ゆくらむ②

幾人か人を葬りし日の記憶暁すしくて思ひ出でつつ

いくたりが迎へられしや 虚実真偽を正しく知れるもののおひだに②⑤

幾人か目ざめるるらしあかつき深く降りいでし雨の音のしづけさ

いくたりかめでにし後の一人ぞと吾を見出でし其さびしさよ①（現代短歌大系）柳原白蓮

いくたりか蒙古馬に乗る将校につづく兵士ら歩調揃へり（支那事変戦地）白井史郎

幾人かゆく西洋人の仲間ならぬ一人谷水をあみからだを振ふ 土屋文明

幾人か吾れにやさしき征でゆきていつしか国にいのち捧げぬ③ 吉田正俊

いくたり

いくたり

幾人か吾は会ひにし世に富み足らひたる人懇^{ねんごう}懃^{ごう}にして①（現代短歌大系）

幾人がわれより先にわが如くとりて吸ひたる手かと思へど

いくたりか我よりほかの母となり老いていまさむ母し偲^{おも}ばゆ（新万葉集二）

いくたりと集ひし友は帰りゆきしましく浅き寂しさにをり⑤

いく人にな一人だに真実の理解を得ざりし墓もあらんか②

いく人^{たり}におのれ後れて歎くまに先立つ人となりぬべきかな②⑩

いくたりの尼かひそめる秋の日を寺門^{じもん}ひらかぬ法達山興福院②

いくたりのいのち消え失せおぼろなり流れ涸れゆき冬ならむとす①

いくたりのうから育てしわが母は世のたのしみにうとく過ぐしき①

幾たりの歌びとたちも見とれけん富良野鳥沼その波の音（遠汐騒）

いくたりの及びがたかる人とするわれにあかざば殺させ給へ（佐保姫）

幾人の学徒をおくる秋の門とさすもさびし老い残りつつ②

広野三郎

堀口大學

太田利衛

今井邦子

渡辺信子

與謝野晶子

片岡恒信

藤好淳之

堀内通孝

四賀光子

與謝野晶子

岡崎義恵

幾たりのかたゐを悶え死なしめし喉の塞^{つま}りの今ぞ我を襲ふ

幾人の甲斐の友達弟を一時たりとも救ひくれにき⑥

幾人の犠牲ののちか宇宙より地に下り立ちて人は微笑す③

幾人の口より口に伝はりて我目にも入るあやしき我名③

幾人の患者救ふべきひまし油を停電の夜は炊きて惜しめる①

幾人の心かよはす友ありや夕鷺ひくく首のべて過ぐ (毎日歌壇)

いくたりの心を超えて到りつれかりそめごとと思ひたまふな② (はたちのうた) 中原綾子

幾人の子に交れども吾子のこゑ聞き違^{たが}へずと聞き居り④

幾人の子の手をひきて出征^{つゝ}の夫送るひとの傍に立つ③

幾人の子らにみとられてけふの日をやすらにいます父の命か①

幾人の子を先だてて今日また子の葬に裕然と坐りゐたまへり④

いくたりの^{しれびと}□人の来て吸はれけむ君が心の美しき淵①

いくたり

明石海人

高田浪吉

初井しづ枝

柳原白蓮

芦田高子

前田炸二

岡本かの子

久保田不二子

初井しづ枝

山下陸奥

関戸信次

いくたり

いくたりの先輩にまづ贈らむと手にとり選ぶ新刊全歌集②

いくたりの血は染みてゐるこの大地に落ちて残れる水筒いびつは歪なり②

いくたりの友帰りたる部屋にゐてかからむ幸に親しむしばし②

幾人の友が誤ちを責めやまぬ小面憎さを今にこほしむ①

幾人の友のまごころにふれゆきてわが貧しさのふるひ立つべし④

いくたりの棄て来しひとを思ふときさすが髪も重たかりけむ①

いくたりの友のおくつき後あとにして帰らふべしや吾立ちなげく

幾人の友の来りて帰りしのち自おのから想ふ己が命いのちのこと①

幾人の友の遺骨を背負ひつつ朝暗きをひた進むかも（支那事変戦地）

いくたりのなやみいやさばとこしへに汝が盲ひし眼の閉づる日は来ん⑥

幾人の柩に添ひてのぼりけむ墓道を踏むさすらひの後（碧潮）

幾たりのひとに逢ひしと問ふひとを打たまほしけれ泣かまほしけれ。②

土岐善麿

栗原潔子

村田利明

村田利明

高田浪吉

吉井勇

伊藤左千夫

鈴木金二

片山不可止

岡本かの子

岡崎義恵

矢沢孝子